

ある恋の話

菊池寛

青空文庫

私の妻の祖母は——と云つて、もう三四年前に死んだ人ですが
くらまえ 蔵前の札差で、ふださし 名字帯刀御免で可なり幅を利かせた
 山長——略さないで云えば、やましろ 山城屋長兵衛の一人娘でした。何
 しろ蔵前の札差で山長と云えば、今で云うと、政府の御用商人で
 二三百万円の財産を擁しておろうと云う、そうそう 錚々たる実業家に当
 る位置ですから、その一人娘の——もつと 尤も男の子は二人あつたそう
 です。——祖母が、小さい時からお乳母んぼひがらかさ日傘で大きくなつたの
 は申すまでもありません、祖母の小さい時の、記憶の一つだと云
 う事ですが、お正月か何かの宮参りに履いた木履はは、朱塗の金き
んまきえ 蒔絵模様んまきえに金の鈴の付いたものでしたが、おまけにその木履の

胴くりぬきが刳貫くりぬきになつていて、祖母が駕籠かごから下りて木履きりを履く時には、ちゃんとその中に湯を通して置くと云う、贅ぜいたく沢たくな仕掛しかけになつてゐるそうです。

祖母は、やつと娘になつたかならないかの十四五の時から、蔵前小町と云うかまびすしい評判を立てられたほどあつて、それはそれは美しい娘であつたそうです。が、結婚すこぶは頗る不幸な結婚でありました。十七の歳に深川木場の前島宗兵衛と云う、天保頃てんぼうの江戸の分限ぶんげん者の番附では、西の大関に据すえられている、千長者の家へ貰もらわれて行つたのですが、それは今で云う政略結婚で、その頃段々と家運の傾きかけた祖母の家では前宗（前島宗兵衛）に、十両と云う途方もない借財こしちを拵こしらへていましたが、前宗と云

う男が、聞えた因^{いん}業^{ごう}屋で、厳しい督促^{どくせつ}が続いたものですから、祖母の父はその督促^{どくせつ}除^よけと云ったような形で、又別の意味では借金^{かゝい}の穴埋と云ったような形で、前島宗兵衛が後妻を探しているのを幸いに、大事な可愛い一人娘を、犠牲にしてみましたのです。

何でも祖母が結婚した時、相手の宗兵衛は四十七だったと云うのですから、祖母とは三十違いです。それに、先妻の子が男女取り交せて、四人もあつたのですから、祖母の結婚生活が幸福でなかつたのは勿^{もちろん}論^{ろん}であります。その上、宗兵衛と云う男が、大分限者の癖に、利慾一点張の男だったらしいから、本当の愛情を祖母に注^つがなかつたのも、尤もであります。その上、借金の抵当と云つたような形ですから、金で自由にしたのだと云う肚^{はら}がありま

すから、美しい玩具おもちゃか何かのように愛する代りに弄もてあそび苛こんだのに過ぎませんでした。その頃まだ十七の真珠のように、清浄な祖母の胸に、異性の柔やさしい愛情の代りに、異性の醜みにくい圧迫おそろや怖おそしい慾情などが、マザマザと、刻み付けられた訳でした。が、幸か不幸か、結婚した翌年宗兵衛は安政五年のコレラ大流行（今で云うコレラ）で、不意に死んでしまいました。

その時、祖母は私の妻の母を懐胎していたのです。何しろ、先妻の子は四人——然しかもその長男は二十五にもなっていたさうです——もある所に、宗兵衛の死後、祖母が止とどまっていると云うことは、まだ年の若い祖母の為にも、先方の為にも思わしくないと云うので、祖母が身が二つになると同時に、生れた子供を連れて離

縁になることになりました。宗兵衛の後嗣と云うのが、非常に物の判わかつた人と見え、子供の養育料として一万両と云う可なりな金額を頒わけてくれたそうです。祖母は、その金を貰つて子供を連れて、一旦里に帰つて来ましたが、子供を預けて再縁をせよと云う親の勧めや又外から降るように来る縁談を斥しりぞけて、娘を連れたまま、向むこう島じまへ別居することになりました。そして、心置きのない夫婦者の召使いを相手にして、それ以来、ズーツと独身で暮して来ました。恐らく最初の結婚で、男と云うものの醜みにくさを散々味あじわわされた為、それが又純真きずつな傷やすき易い娘時代で一段と堪こたえたと見え、癒いやしがたい男嫌きらいになつてしまつたのでしよう。祖母は向島の小さい穏かな住居で、維新の革命も彰義隊の戦争も、凡すべて対

岸の火事として安穩あんのんに過して来ました。そして明治十二三年頃に、その一人娘をその頃羽振の好かつた太政官の役人の一人である、私の妻の父に嫁とつがせたのです。祖母の結婚が不幸であつたのと反対に、その娘の結婚は可なり祝福されたものでした。祖母は、間もなくその娘の家に、引き取られて其処そこで幸福な晩年を送りました。孫達を心から愛しながら、又孫達に心から愛されながら。

×

私が妻の祖母を知つたのは、無論妻と結婚してからであります。その時は、祖母は七十を越えていましたが、後室様と云つても、恥しくないような品位と挙動とを持った人でした。私の妻が彼女の一番末の孫に當つていましたから、彼女の愛情は、当時私の妻

が独占していると云う形がありました。従つて、三日にあげず、私達の新家庭を尋ねて来ました。美しい容貌ようぼうを持ちながら十八の年から後家を通した人だけあつて、気の勝つた男のように、ハキハキ物を云う人でありました。

何時いつも、車の音が門の前にしたかと思うと、彼女の華はなやかな、年齢よりは三四十も若いような声がしまして、

「又年寄がお邪魔に来ましたよ。若い者同志だと、時々喧嘩けんかなどを始めるものだから」などと、その年齢には丸きり似合わないよな、気さくな、年寄にしては蓮葉はすつばな挨拶あいさつをしながら、どしどし上つて来るのであります。私は、祖母を人格的にも好きだつた上に、江戸時代、殊ことに文化文政以後の頽たい廃はいし始めた江戸文

明の研究が、大好きで、その時代を背景として、いい歴史小説を書こうと思っていた私は、その時代を眼で見身体からだで暮して来た祖母の口から、その時代の人情や風俗や、色々な階級の、色々な生活の話聞くことも、非常な興味を持ちました。祖母もまた、自分の昔話をそれほど熱心に聞く者があるので、自分も話すことに興味を覚えたとみえて、色々面白い昔話をしてくれました。江戸の十八大通じゅうはちだいつうの話だとか、天保年度の水野越前守えちぜんのかみの改革だとか、浅草の猿若町さるわかちやうの芝居の話だとか、昔の浅草観音の繁はんじ昌やうだとか、両国の広小路に出た奇抜な見世物の話だとか、町人の家庭の年中行事だとか、色々物の本などでは、とても見付かりそうもない精細な話が、可なりハキハキした口調で、祖母の口か

ら話されました。私が熱心に聞く上に、時々はノートに取ったりしたものですから、祖母は大変私を信頼し、私に好意を持つようになりました。妻の姉妹は三人もあつて、銘々東京で家庭を持っているのですが、彼等の共通の祖母が、私の家へばかり足繁しげく来るものですからおしまいには、

『貴方あなたの家だけで、お祖母さんを独占してはいやよ。お祖母さんもお祖母さんだ、青山の家へばかり行って』などと、妻の姉妹が、不平を滾こぼすほどでありました。

×

もう、その頃は、祖母の話も、段々種が尽きかけて来た頃でありました。ある日私が、

「何か面白いお話はありませんでしょうか。何か少し変わった、お祖母さん御自身がお会いなさったような出来ごとで」と、少し手を換えて話をねだりますと、祖母は少し考えていましたが、「そうだね。私は、私自身の事で誰にも話さないことがただ一つあるんだよ。一生涯誰にも云うまいと思つていたことだが……」と、祖母は、一寸そのいかにも均斉の取れた顔を赤めましたちよつとが、「そうだね、懺悔ざんげの積りでそつと話そうかね。綾さん（私の妻の名です）なんかの前では一寸話されない話だが丁度貴君一人だから」と、云いながら、祖母は次のような話を始めました。私は、その話を次ぎに書こうと思いますが、四五年前の話ですから、祖母の用いた口調までを、ソツクリ伝える訳には行きません。その

お積りで聞いて下さい。

「私は、綾さん達のお祖父さん（それは彼女の夫の前島宗兵衛です）に懲り懲りしたので、もう一生男は持つまいと決心したのです。そして、その決心をやつと押し通して来たが、ただ一度だけ危くその覚悟を破りかけたことがあるのです。恥を云わねば分らないが……」と祖母は一寸云い憎くそうにしましたが、

「自慢じゃないけれど私は、子供を連れた出戻りであつたけれども、お嫁さんの口は後から後から断りきれないほどあつたのですよ。三千石取の旗本の若様で、再婚でも苦しくない、子供も邸に引取つても、差さしつか支えがないと云うような執心な方もあつたけれど、私の覚悟はビクとも動かなかつたのです。娘が、大きくなる

までは、世間とも余り交際しない積りで、向島へ若隠居をしてしまったのです。その話は幾度もしたけれど——向島へ行って何年目だろう、私が何でも二十四五になった頃だろう。御維新になろうと云う直ぐ前すでしたらうか。私は、自分の暮しが、何となく味気ないような淋さびしいように思い始めて来たのです。それで、やっぱり家にばかり、引込んでいるから、退屈をするのだらうと思つて、その頃五ツか六ツになった娘を連れて、よく物見遊山ものみゆざんに出かけるようになったのです。今までは世間からなるべく離れよう離れようとした私が、反対に世間が何となく懐なつかしく思われて来たのです。その頃です。私はある男を——この頃の若い人達の言葉で云えば——恋するようになったのです。笑つちやいけませんよ。

お祖母さんは懺悔の積りで話しているのですから。その男と云うのは役者なのです。後家さんの役者狂いと云えば、世間に有りふれた事で、お前さん達も苦々しく思うでしょうが、私のは少し違っていたのです。私が恋したその役者と云うのは、浅草の猿若町の守田座——これは御維新になってから、築地に移って今の新富座みさになったのですが、役者に出ていた染之助と云う役者なのです。若衆形わかしゆがたでしたが、人気の立たない家柄もない役者でしたが、何故かこの役者が舞台に出ると、私はもう凡ての事を忘れて、魂を抜かれたような、夢を見ているような、心持になってしまふのです。何でもこの役者は、大谷友右衛門ともえもんと云う上方かみがたの千両役者、今で云えば鴈治郎がんじろうと云ったような役者の一座で、江戸に下

ったのだが、初めは、江戸の水に合わなかったと見えて、舞台へ出てもちつとも見物受がしないのです。どんなに笑つても、きつと顔の何処かに憂の影が、消え残つていと云つたような淋しい顔立が、見物には受けなかつたと見えるのです。また、この役者の動作が、何処までも質素なのです。当り前の旧劇の役者が、怒る時は目を剥いたり、泣く時は大声で喚めいたり、笑う時には小屋を揺がせるような、高声を出す代りに、この役者は泣く時も笑う時も怒る時も質素で、心から泣いたり怒ったり笑うたりする有様が、普通の人が泣いたり笑うたりすると少しも違わないんですよ。其処が、私の胸にピツタリ響いて来たのです。其処がその頃の見物には、少しも受けなかつたところだったのですが」

「今じゃ、そう云う演り方を、写実主義と云うのです。そう云う役者を見出したお祖母さんは、さすがにお目が高かったですね」と、私は心から感心して云った。「貴君のように冷かしてくれては、困るが、何しろ、この役者が見物に受けなければ受けないほど、私はこの役者に同情するようになったのです。この役者の芸を見てやるのは、私一人だと云う気になってね。何でも、この役者を初めて見たのは、鎌倉三代記の三浦之介をしていた時だったが、私の傍そばに居る見物は、皆口々に悪口を云っていたのですよ。『上方役者はてんで型を知らねえ。あすこで、時姫の肩へ手をやるって法はねえ』とか『音羽屋おとわ（その頃は三代目菊五郎だったが）の三浦之介とはお月様と泥すっぱん鼈だ。第一顔の作り方一つ知らねえ』

とかそれはそれはひどい悪口ばかり云っていました。が、私は型にかな適っているかどうかは、知らなかったが、染之助の三浦之介は、如何いかにも傷ついた若い勇士が、可愛い妻と、君への義理との板ばさみになつてゐる、苦しい胸の中を、マザマザと舞台に現してゐるようで、遠い昔の勇士が私の兄か何かのように懐しく思われたのでした。それ以来、私は毎日のように守田座へ行きたくなくなつたのです。それで浅草へお参りに行くと云つては、何も知らない頑がんぜんのんない綾ちゃん達のお母さんを、連れて守田座へ行つたもので、それも一日通しては見えていられないから、八どつ刻きから——そ

う今の二時頃ですが、染之助の出る一幕二幕かを見に行つたので、終しまには子供を召使いに預けて、自分一人で毎日のように出か

けて行くようになりました。そうやって来ると、今までは何とも思わなかった自分の美しいと云う評判が、嬉しく思われて来たのです。何だか容貌自慢のようですが」と、祖母は、一寸言葉を澱ませました。私はそう云う祖母の顔を見ながら、二十四五の女盛りの祖母を想像してみました。すると、私の眼の前の老女の姿は、忽ちに消えてしまつて、清長の美人画から抜け出して来たような、水もたるるような妖艶な、町女房の姿が頭の中に歴々として浮びました。

「その頃まで、自分が美しいと云う噂を聞いても、少しも嬉しいとは思わなかったが、その頃から、自分が美しく生れたことを欣ぶような心になつて来たのです。まあ、染之助に近づく唯一つの

望みは、自分の容貌だと思つたものですからね」

「ところがね」と、祖母は急に快活らしい声に變つたかと思うと、

「染之助の素顔を、一度でもいいから見たい見たいと思つていた願が叶^{かな}つて、外ながら染之助の素顔を見たのですよ。ところが、

その素顔を一目見ると、私の三月位続いた恋が、急に醒^さめてしまつたから可笑^{おか}しいのですよ。その日も、私はたつた一人、娘も連れずに守田座へ行つた帰り少し遅くなつたので、あの馬^{うまみち}道の通りを、急いで歸つて来たのですよ、すると、擦^すれ違つた町娘が

『あら染之助が来るよ』と、云うじゃないか。私は、その声を聞くと、もう胸がどきどきして、自分の足が地を踏んでいるのさえ分らない程に、逆^{のぼ}上せてしまったのですよ。それでも、こんな機

を外^{はず}しては、又見る時はないと思つたから、一生懸命な心持で、振返つて見ましたよ。ところが、私の直ぐ後に、色の蒼^{あお}ざめたと云つても、少しどす黒い頬^{ほお}のすぼんだ、皮膚のカラカラした小男が歩いて来るじゃないか、私はこんな男が、あの美しいおつとりとした染之助ではよもあるまいと思つて、その男の周囲を探して見たけれども、その男の外には、樽^{たる}拾いのような小僧と、十七八の娘風の女とが、歩いて来るばかりで、染之助らしい年配の男は、眼に付かないのですよ。私は、染之助の事ばかりを考えていたので、娘の言葉を聞き違えたのであらうと、内心恥しくなつたけれど、念のためだと思つたから、その色の蒼い小男の後をついて行つたのですよ。すると、その男は観音様の境^{けいだい}内へ入つて、今仲

見世のある辺にあつた、水茶屋へ入るじやないか。私も何気ない風をして、その男の前に、三尺ばかり間を隔おいて腰をかけたのです。男は八丈の棒ぼうじま縞の着物に、結城紬ゆうきつむぎの羽織を着ていたが、役者らしい伊達だてなところは少しもないのですよ。私はきつと、人違いだと思ひながら、何気なく見ていると、物の云い方から身の扱こなし方まで、舞台上の上の染之助とは、似ても似つかぬほど、卑しくて下品で、見ていられないのですよ。こんな男が、染之助であつては堪たまらないと思つていけると、丁度其処へ三尺帯をしめた遊人らしい男が、二人連で入つて来て、染之助を見ると、

『やあ！ 染之助さん、芝居の方はもう閉場はねましたかい』と、云うじやないか。私は身も世もないように失望してしまいました。

染之助の美しさは、舞台上だけまぼろしで、本当の人間はこんなに醜いのかと思うと、私は身を切るように落胆したものです。すると、その遊び人のような男が、

『どうです、親方。花川戸はなかわどの辰親分の中で、いい賭場とばが開いて

いますぜ』と云うじやありませんか。これで見ると、染之助という男は、こんな男を相手に賭博とばくを打つような身持の悪い男だと分りました。私は、悪夢が醒めたような心持で、怖いもの汚らわしいものから、逃のがれるように逃げ帰ったのです」

「まあ、それでよかった。もし、お祖母さんが、そんな役者に騙だまされでもしたら、綾子なんかはどうなっていたかも分らない」と、私はホツとしたように云いました。

「ところが、まだ後日譚ものがたりがあるのですよ。……その日、私は家へ帰つてから、つくづく考えたのです。私が恋しいと思つていたのは、染之助と云うような役者ではなく、染之助が扮ふんしている三浦之介とか勝頼とか、重次郎とか、維盛これもりとか、ああした今の世には生きていない、美しい凛々りりしい人達ではなかつたかと、そう思うと、我ながら合点が行つたように思うのでした。お祖父さんに、散々苛いじめられて世の中の男が、嫌いやになつた私は、そう云う舞台上に出で来る、昔の美しい男達を恋していたのかも分らなかつたのよ。私は、そう思うと、素顔の染之助の姿が堪らない程嫌になつて、日参のように守田座へ行つたのが、気恥しくなり、それきり守田座へは足踏みしなくなつたのです」と、祖母は話を終りそ

うにしました。

「それぎりですか。それでもう、染之助とか云う人にはお逢いあになりませんでしたか」と、私が後を話させるように質問しますと、「だから、後日譚があると云ったじゃありませんか。半年ばかりは、守田座へ足踏みしなかつたのですが、ある日の事娘が、

『お母さん、この頃はちつとも、お芝居に行かないのね。昨日、お師匠様の所で聞いたのよ。今度の守田座はそれはそれは大変な評判ですつてね』と、云うじゃありませんか。娘を踊りのお稽古けいこにやってあつたのですが、そこで芝居の噂を聞いて来たらしいのです。素顔の染之助を見た時に感じた不愉快さが、段々醒めかかつていた頃ですから、私は芝居だけ見る分には、差さ支しえつかはある

まいと思つて、娘を連れて、守田座へ行つて見たのです。芸題は忠臣蔵の通しで、染之助は勘平をやつてゐるじやありませんか。

私はあの五段目の山崎街道のところ、勘平が——本当は染之助が、鉄砲と火繩とを持つて花道から息せき切つて駆けつけるのを見た時に、アツとばかりに感歎してしまつたのです。あの馬道の通りで見た、色の蒼黒い、頬のすぼんだみすぼらしい男の代りに、如何にも零落おちぶれた武士にあるような、やさしみと品位とを持つた男が一生懸命な心持で、駆け付けて来たありさまが、何とも云えず、美しく勇しく私の胸に映つたのです。馬道で見た染之助の素顔のみにくさなどは、何処かに消えてしまいました。私は染之助の勘平を一目見ると、忽ち昔と同じような有頂天な、心持になつ

てしまったのです。それからと云うものは、又毎日のように染之助を見に行きました。今度は染之助に惚ほれているのではない、染之助の扮している芝居の役々に惚ほれているのだと、自分でもよく判わかつていましたから、私は守田座へ毎日のように通うのが、少しも恥しいと思われませんでした。前よりも、おっぴらに、誰に遠慮も入らないと思いましたが、平土間の成るべく舞台に近い、よい場所を買切つて毎日のように通いました。三度に一度は、娘を連れて行きましたが、しまいには娘の方で、飽きてしまつてついで来ないので、結句仕合せに思いました。そんなに毎日通う上に、染之助が舞台に出る時間に定きまつて這はい入つて行き、染之助の出る幕が済んでしまうと、サツサと帰つて来るのですから、到頭

芝居の中でも、評判になつてしまつたのです。あの女客は、成なりこ駒屋ま（それは染之助の屋号です）に気があるのだと、評判して
いるらしいのです。そう云う噂が立つに従つて、舞台の上の染之
助がじつと私の方を見詰め始めたのです。私は舞台の染之助から
見詰められる事は、三浦之介なり、勝頼なり、勘平なり、義経な
り、昔の美しい人達から、見詰められるような気がして、少しも
悪い気持はしないのです。その中うちに段々染之助の見詰め方が烈はげ
くなるのです。ただ、あの女は『俺のひいき客だから、見てやれ』
と云う位ではなさそうなのです。日が経たつにつれて、染之助の私
を見詰めている眼付が、火のように燃えて来るのです。私は意外
に思わずにはいられませんでした。そうして、私と染之助とは、

舞台の上と下とで、始終じつと見詰め合いました。両方で見詰め合いました。私の見詰めているのは、染之助ではなくて、三浦之介とか重次郎などと云う昔のまぼろしの人間だったのですが、染之助はそうは思わなかったらしいのです。

ある日の事、私が何気なく見物していますと、一人の出方が、それはそれは見事なお菓子、今のような餅菓子ではなく、手の入った干菓子もちの折に入ったのを持って来て、

『これは、染之助親方からのお届物です』と云うのです。私はそれを聞いた時、舞台の上の美しい斎世宮——その時は、菅原すがわら伝授じゆてならい手習鑑かがみが芸題で、染之助は斎世宮ときよのみやになっていたのです——のまぼろしが消えてしまつてその代りにあの馬道で逢つた蒼黒

い、頬のすぼんだ小男の面影が、アリアリと頭の中に浮んだのです。その瞬間、私は居たたまらないような不快を感じて、幕が閉ると、逃げるように小屋を出ました。無論、その干菓子などには、見向きもしませんでしたよ。

そんな事があつてから、半月ばかりの間は守田座の木戸を潜くぐらなかつたよ、又その中に何となく染之助の舞台姿が恋しくなつて来るのですよ。何でもその年の盆興業でした。馬琴ばきんの八犬伝を守田座の座附作者が脚色したのが大変な評判で、染之助の犬塚信乃いぬづかしのの芳流閣の立ち廻りが、大変よいと云う人の噂でありましたので、私はまた堪らないような懐しさに責められて、守田座の木戸を潜つたのでしたよ。平土間のいつもの場所に坐っていると信乃にな

つた染之助が、直ぐ私を見付けてしまいました。それは、長い間母に別れていた幼児が、久し振りに恋しい母を見付けたような、物狂わしいような、それかと云つて、直ぐにも涙が、ほとびそうな不思議な眼付でありました。私は半月も来なかつたことが、染之助に対して、何となく濟まないように思つた位でした。染之助の信乃は、相手の犬いぬかいげん飼現八と、烈しい立ち廻りをしながら、隙すきのあるごとに私の方へ、燃ゆるような流ながしめ瞥なげめを送つているのですよ。実際の染之助から、こんなに度々たびたび、見詰められては、一分も座に居られなかつたに違いない私も染之助が信乃になつていゝるばかりに、何だか信乃の恋人の浜路はまじにでもなつたように、信乃から見詰められる事が胸がわくわくする程嬉しかつたのですよ。

私も、信乃から見詰められる度に、じつと見返したり、時には二ツコリと笑って見せたり、恋人から見詰められたと同じように、うつとりとなっていたのです。

やがて、幕が下ってから、手ちようず水を使い、廊下へ出ると、気の付かない間に、私を追いかけて来たらしく私の用をしていた出方が、

『もし奥様、ちよつと』と云うじゃありませんか。元来私は後家暮しはしていたものの、髪を切らないばかりでなく、勝かつやま山に結ではいりつたり文金の高島田に結つたりしている上、それで芝居に出這入みなりするようになってからは、随分意気な身装みなりをしていたから町家の奥様とも見えれば、旗本のお妾めかけさんのようにも見えたのでしよう

よ。私が、

『何か用かい』と立ち止つて聞くと、出方は声を低めながら、

『あの染之助さんが、是非一ちよつと寸奥さんにお目にかかりたいと云

うのですが、……』と、モジモジもみで揉手をしながら云うのでした。

もし、その時、出方が『あの犬塚信乃さんが』とでも云つたら、

私は二つ返事で会いに行つたかも、知れなかつただけけれど、染

之助と云うと、直ぐ馬道であつた色の蒼黒い小男の顔が、アリア

リと眼の前に浮んで来て、逢う気はしなかつたのですよ。私は、

可なり冷淡に、

『何の御用か知りませんが、御免を蒙こうむりたいと云つておくれでな

いか』と、云いました、舞台姿はあんなに私の心を囚とらえていなが

ら、役者その人は恋しいとも何ともないのでした。出方は、私の顔を見て呆氣あつけに取られていたようですが、そのままスゴスゴと行つてしまいました。

それから、私は狂言の変り目毎に、三四度は欠かさずに、見物していました。見物する毎に、染之助が、私を見詰める瞳ひとみが益ますます

々熱して来るのに気が付きました。余り染之助が私を見るので、私の傍に坐っている女客達が私に可なり烈しい嫉妬しつとを、見せる程になりました。が、私と染之助とは、一度も逢つたことはないのです。染之助の方でも、私が彼の言伝をきつぱりと断つてから、私の心が測りかねたものと見えて、もう少しも手出しをすることはありませんでした。が、私は染之助こそ、嫌きらつていたが、染之

助の扮した芝居の中の若い美しい人達が見詰める時には、恋人に見詰められたような嬉しさを感じて、じつと見詰めかえしていたのでした。

丁度私が、二十六の年の十月でした。染之助の居る一座は、十月興行をお名残なごりに上方へ帰って、十一月の顔見世かおみせ狂言からは、八代目団十郎の一座が懸かかると噂が立ちました。私は、二年近くも、馴染なじみを重ねた染之助の舞台に、別れねばならぬかと思うと、今まで自分の眼の前にあつた華はなやかなまぼろしが、一度に奪い去られるような淋しさを感じました。が、その噂は、時が経つに連れて本当だと云うことが分りました。

私は、お名残だと思つたものですから、その興行は、二日隔おき

位に足繁しげく通いました。その時の狂言は、義経よしつね千本桜せんぼんざくらで、染之助はすし屋の場で、弥助——実は平維盛たいらのこれもり卿になつていました。私は、あの召使に身を窶やつしながらも、溢あふれるような品位を持つた維盛卿の姿を、どれほど懐しく見守つたことでしょう。私は、維盛卿に恋をするすし屋の娘をどれほど、羨うらやましく思つたでしょう。しかも、私はこの維盛卿が、私の眼に写る染之助の最後の姿だと思つと、更に懐しさが胸に一杯になるのでした。

ところが、この狂言が段々千秋楽に近づく頃でした。染之助の舞台姿に別れる私の悲しさが、段々私の小さい胸に、ひしひしと堪こたえて来る頃でした。私がある日、すし屋の幕が終ると、支度もそこそこに帰りかけると少しも顔馴染のない役者の男衆らしい男

が、私を追っかけて来て、

『染之助親方が、これは御ひいきに預りましたお礼のしるしに、差上げる寸志でございますから、まげてお受納下さいますようとお申しております』と、云いながら、むらさきちりめん紫縮緬ふくさの小さい袱紗ぶつみ包を出すのでした。染之助と云う役者には、少しも興味のなはずい筈の私も、やっぱり染之助の舞台に、名残が深く惜しまれたためでしょう。無言で黙礼しながら、その袱紗包を貰もらいました。何か染之助の紋の入った配り物だろう位に、思っていたものです。が、家へ帰って来て、開けますと、中から出たのは、思いがけなく一通の手紙でした。それには、役者とは思われない程の達筆でこまごまとかいた長い文句がありました。もうたしかな事は忘れ

てしまったが、何でもこのような意味の事が書いてあったのでした。

過ぐる二年あまりの年月の間に、貴女様あなたはその美しい二つの

お眸ひとみで、私を悩み殺しにしようとなさいました。貴女は私を恋

して下さるのでもなければ、それかと云つて憎んでおられ

るのでもない。ただ長い間、私を弄もてあそんでおられたとより外には、

考えようありません。初め、愚な私は貴女が私を恋して下さ

るものだとばかり思つて、どれほど自分自身を幸福な人間だと、

考えたことでしょう。私は、見物から、余り喝かつさい采も受けませ

んでしたが、貴女の二つのお眸が、私の動作を、じつと見てい

て下さるのだと思うと、千人の見物から喝采せられるよりも、

どれほど嬉^{うれ}しかったか知れませんが、その中に、私自身貴女の眸の力が、私の心の奥深く日に増し、貫いて来るのを感じました。私は、役者として長い間、色々な女性にも接して来ましたが、貴女ほどの美しさを持った方に一度も逢^あつたことがないように、思い始めたのです。何時^{いつ}の間にか、私は貴女をお慕い申すようになっていたのです。私は貴女のお姿が見えない時は、見物席がどんなに一杯であろうとも、芝居をするのに少しも力が入らないのです。又それと反対に、どんなに入りが少い時でも、貴女のお姿が平土間の一隅^{いちぐう}に見えますと、私は生れ代つたような力と精神とで、私の芸を演じました。そして、私の動作につれて貴女のお眼の色が、輝いて来るのを見て、どんなに幸福を

感じたでしょう。私が舞台の上で歎けば、貴女もお歎きになり、私が舞台上で笑えば、貴女もお笑いになるのを見て、私はどんなに嬉しく思ったでしょう。私は、貴女が私を愛して下さることと信じて疑いませんでした。そして、貴女が私に恋を打ち開けられるのを、じつと辛抱して待っていました。が、私の期待は外ずれて、貴女は仲々その堅い蕾つぼみを、お開きにならないように、私には思われたのでした。私は、到頭自分自身の方から、切ない恋を打ちあける手段を取りました。ところが意外にも、それは貴女に依よつて手酷てひどい、少しの同情もない、拒絶にあつてしまつたのでした。私は、大変な思違あやまいをしたと思ひました。私は、貴女が私を愛して下さるものと、そのとき思い詰めてい

たのでした。貴女が、私を見詰めて下さると思ったのは、皆自分の迷いで、普通の見物が役者を見詰めるのと同じ意味で、貴女も私を見詰めておられたのだと思うと、私は自分の思違いが、穴にでも入りたいうように、恥しく思われたのです。私はその事があつて以来、暫くしばら貴女のお姿が、見物席に見えなかつたので、愈々いよいよ私の思い違いを信じ、貴女が私の無礼をお怒りになり、あれきりお姿をお見せにならなくなつたのではないかと思うと、私は身も世もないような、深い失望と嗟嘆さたんとに暮れてしまいました。その当座と云うものは、私はよく動作を間違えたり、台詞せりふが誤つたり気の短い座頭ざがしらから、よく『間拔め！
気を付けろ！』と云つたような烈はげしい言葉を浴びせかけられた

りしました。が、私は急に魂を奪われた人間のように、藻抜もぬけの殻の肉体だけが、舞台上で操人形あやつりのように、周囲の人達の動くのに連れられて、ボンヤリ動いていたのに過ぎませんでした。世間からは、男地獄のように思われている俳優の一人である私は、今までも随分恋もし、女も知っているではありませんが、私の心の底までも動かして、強い一生懸命の恋をしたのは、これが初めてでございます。しかも、私はその懸命必死な恋に、破れた訳でありますから、その当座はかように落胆失望致したのも、無理はございません。ところが、いかがでございますしやう。貴女の事を段々思いきり、貴女が私を思つて下さると思つたのは、私の飛んでもない心得違ひだつたと、漸ようやく諦あきらめかけて

いた時でした。私はふと——左様でございます。あれは確か、私が八犬伝の信乃で舞台へ出た時であります——見物席の方を眺めますと、何時もとは異つて、平土間の見物席の辺りが神々しく輝いているように思つたのであります。これは私が大仰に申すのではありません、実際に私はそう感じたのであります。あああの御婦人が来て下さつたなど、私は直ぐ感づいてしまいました。私は犬飼現八と立ち廻りをしながら、隙を窃ひまぬすんで、見物席の何時も貴女が、坐っていた辺りを見ますと、私の感じは私をあざむいてはおりませんでした。小石のようにゴタゴタ打ち並んだ客の中に、夜光の球のように貴女のお顔が、辺を圧してとも申しましようか、白々と神々しく輝いていたではあり

ませんか。しかも、あの二つのお眸が美しい私の身に取つては、
懐なつかしさこの上もない光を放つて、犬塚信乃になつた私の身体からだを、
突き透すほどに鋭く、見詰めておられるではありませんか。そ
れは、明かに恋の瞳ひとみです。恋に狂つている女の瞳です。私は貴
女から手酷く拒絶せられたのを忘れて、やっぱり貴女は私を思
つていて下さるのだと、考えずにはいられませんでした。が、
あの日私が又々無ぶしつけ躰を申して、貴女様から、手酷く拒絶され
たことは申上げますまい。が、その後も貴女様は毎日のように
お見えになりますので、私の無躰な申出が、貴女の氣きに触さわつた
ので、貴女が私を思つて下さる事には変りはないのだと、私は
ホツト安堵あんどの胸を撫なでずにはいられませんでした。時期を待た

ねばならぬ。貴女が自然に私にお心を、打明けて下さるまで、静に待っているより外はないと私は覚悟を決めて、それ以来は、ただ舞台の上だけからじつと貴女を見詰めていたのです。その時から、もう一年半になります。その間、貴女の私を見詰めて下さるお眸は段々輝いて来るばかりで、今にも今にも貴女のお心の中の思は、張り裂けるだろうと、私は考えずにはいられます。せんでしたのに、貴女は御熱心に舞台の上の私を見詰めて下さるだけで、一寸も一分も私に近づこうとはなさらないのであります。私はこの頃では、貴女のお眸の謎なぞに苦しめられない日はなくなりしました。それは、恋の眸ではないのか、ただ上部だけで私の心を悩なやまし焼きつくしても、その底には少しも温味も慈悲

もない偽のまどわしの眸であつたのかと、私は思い迷うようになりしました。私は、この頃では貴女に見詰められることが段々苦しくなりました。貴女のお眸の謎が、私の心にも身にも、堪えられないほど、重々しくヒシヒシと懸つて来るのです。私は一日もこの重さに堪えられなくなりました。ところが、今度思いがけなく一座が、京の方へ上る事になりました。段々、出立しゅつのたつ日が近づいて来るのであります。私は江戸に深い執着も持っていませんが、ただ貴女のお眸の謎を——貴女の本当のお心持を——解かないで、江戸を去るのが、如何にも心残りであります。今まで、私の舞台をあれほど、見物して下さいましたお情に、ただ一度でもよいから逢つて下さいまし。そして、貴女の

お口から、貴女の本当のお心を話して下さいまし。私は、貴女のお口から、お前を愛していたと、云う言葉だけを聞けば、私はそのお言葉を、何よりの餞せんべつ別として、江戸を去る積りでありませぬ。又、貴女のお口から、お前を愛してはいなかった、と云うお言葉を聞いても私はやっぱり、何よりの餞別として、江戸を去りたいと思うのです。どうか、私の一生の願を聞いてやると思おぼしめ召して、ただ一度で宜よろしゅうございますから、お目にかかることは出来ませんでしようか。

まあ、こう云ったような意味が、それはそれは長たらしい文句で書いてあつたのです」

「それでお祖母様も、到頭お会いになつた訳ですね」と、私が聞

きますと、祖母はうつとりと、昔を思い出したような眼附をしな
がら、

「会ったことは会ったのです。向うも、やっぱり私の心持が、少
しは分つたと見え、芝居茶屋の二階へ舞台姿の維盛卿でやって来
たのです。私はあおぐろ蒼黒いほお頬のすぼんだ小男の染之助の代りに、美
しい維盛卿と逢つたのだから、先方が神妙に控えている中うちは好か
つたけれど、その維盛卿が私の前で手を突いて、何かクドクドと
泣いたり口説いたりするのを聞いていると、維盛卿の姿の下から、
あの馬道であつた、染之助の卑しい姿がのぞ覗いているような気がし
て、真身に相手になつてやる気は、どうしても起らないので、私
はいい加減に切り上げて帰つたが、先方ではヒドク落胆していた

ようだったがね」

「それから、どうになりました」私は話の結末を聞こうと思いましたが。

「それきりでした。京へ行つてからはどうなったか、丸きり消息はありませんでした。^{もつと}尤も御維新のドサクサが直ぐ起つたのですからね」と祖母は昔を想い出したような、懐旧的な情懷に沈んで行つたようでありました。私は、祖母の恋物語を聞いて、ある感銘を受けずにはいられませんでした。役者買とかをする現代の貴婦人と云つたような階級とは違つて、祖母が役者の醜い肉体には恋せずして、その舞台上の芸——と云うよりも、その芸に依^よつて活^{いか}される、芝居の人物に恋していたと云う、ロマンチックな人間

離れをした恋を、面白く思わずにはいられませんでした。世の中に生きている、醜い男性に愛想を尽かした祖母は、何時の間にか、こうして夢現の世界の中の美しい男に対する恋を知っていたのです。私は、こうした恋を為し得る、祖母の芸術的な高雅な人柄に、今更のような懐しみを感じて昔の輝くような美貌を偲ばすに足る、均齊の正しい上品な、然し老い凋びた顔を、しみじみと見詰めていました。

青空文庫情報

底本：「藤十郎の恋・恩讐の彼方に」新潮文庫、新潮社

1970（昭和45）年3月25日初版発行

1990（平成2）年1月15日第34刷

初出：「婦人之友」

1919（大正8）年8月

入力：川山隆

校正：noriko saito

2008年8月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ある恋の話

菊池寛

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>